

木村の前に木村なく、木村のあとに木村なし

講道館柔道の歴史は、100年あまりである。名人達人強豪が大勢現れたが、誰がいちばん強いかが常に話題になる。(これは剣道や相撲でも同じことである。) 全盛期が違うと単純な比較はできない。

富田常雄さんは「姿三四郎」を著した作家である。自身も柔道五段で、父親が富田常次郎。嘉納治五郎とは元々縁があったが、柔道創設期の四天王のひとりで、他に西郷四郎、鬼と呼ばれた横山作次郎、米国で活躍した山下義韶がいる。この西郷四郎が姿三四郎のモデルで、名人達人綺羅星のごとくに出現したが、大技山嵐の唯一の使い手である。・・・この富田常雄さんが、木村政彦を讃えて言った言葉が表題の「木村の前に木村なく、木村のあとに木村なし」・・・まあ、これほどの誉め言葉もない。・・・誉め言葉として最高級だな。

講道館の歴史上、最高位の十段は6人いる。(現在2012.03.はもう少しいるだろう) その最後の十段が三船久蔵さんで、いわゆる「空気投げ」の考案者である。小生が子供の頃にはご存命であった。この三船十段の若い頃、前後に歴史に残る2人がでている。前田光世と徳三宝である。

(空気投げとは、隅落としともいい、シドニー五輪で野村選手が優勝したときの決まり手である。足腰を直接払わずに身体の流れて自然に相手が裏返ってしまう技である。三船十段が合気道の植芝盛平さんと対談したとき、しきりに合気道の技を見たがったというが、似ているところがある。)

ブラジルのアマゾン河に行った時、現地マナウスの日本人社長がガイドを勤めて下さったのであるが、小生が「ブラジルといえばコンデ・コマですけどね」と言ったところ、昔現地の日本人会で、最初にアマゾンに来た日本人を知っているか、と聞いた人がいてみんなの失笑を

買ったそうである。山下義韶さんとともに米国に渡り、さらにブラジルに行き、生涯今でいう異種格闘技戦で異国のレスラーやボクサーなどと戦い、2000回以上不敗を誇り、日本人の間から自分たちの誇りにもなることから、小柄な伯爵とでもいう意味の「コンデ・コマ」と異称をつけられたのが、前田光世である。のちのグレイシー柔術の祖でもある。アマゾン河口のベレンで日本人の生計のために大変な苦勞をした挙句に亡くなった恩人でもある。

徳三宝は、明治大正昭和初期まで活躍し、全盛期の西郷四郎とどちらが強いのか、といわれた。西郷四郎の全盛期は短くて、3~4年だったらしい。だから伝説の強豪なのである。徳三宝は、二代目の柔道の鬼と呼ばれ、講道館でも群を抜いて強く、野中の一本杉、相手に稽古をつけるというより、来た者を投げ飛ばすのが自分の稽古だったという。徳が1トンの馬を張り倒したといわれる。この頃の猛者では、投げるというより提灯を畳むような技で投げつけるのが多かった。その中でも筆頭は徳三宝である。たとえば、原康史さんの柔道三国志では、三分の一を費やして徳三宝の際立った強さを書いておられる。西郷四郎の足の裏は、畳にペタッと吸い付くような状態で、山嵐にぴったりの状態で、かつ投げられにくい。徳三宝もそうであったという。

富田常雄さんは、徳三宝の全盛期も知っておられるだろうし、全日本選手権をとった選手もたくさん見てこられたはずである。それでもなおかつ、「木村の前に・・・」と誉めた。昭和12年から15年まで全日本四連覇。そして戦争がすんで戦後第一回、第2回の全日本選手権でも優勝して10数年間不敗を誇った。

木村政彦の師匠は牛島辰熊である。一度日本一になった。この人は東條英機をつけ狙っていたことでも知られている。大変なスパルタ教育で、木村もよく従ったものだが、それなりの努力もしている。

たとえば、毎日うさぎ跳び1km、腕立て伏せ1000回、打ち込み1000

本（大木に帯を結んで、投げの形を練習する）、握力をつけるための空手の巻わら突き 500 回、鉄でできた下駄を履いて歩く、など。空手にも興味を持ち、極真空手の創始者大山倍達とも仲がよかった。木村の身長は 169cm であるが、胸板の厚さなど驚異的である。得意技は大外刈りであるが、木村の大外刈りは、むしろ大外落しとでもいうべきもので、真下に投げつけられるから脳震盪を起す者が続出したというし、しまいには稽古の相手を断られる始末。のちにプロレスに行った遠藤幸吉が、「同じ六段じゃないか」と稽古に行ったら、組んだ途端にアッという間に投げ飛ばされていた、と語っている。同じ六段でも格が違っていたという。

戦後の木村は荒れていて、というよりみんな自分の生計を立てるのがやっとの状態だった。だからヤミ屋もした。牛島が柔道家の生活のためにプロ柔道を始めたし、これに木村も遠藤も参加したが、長続きしなかった。米軍の MP と喧嘩三昧で、橋の上からジープを川の中に放り込んだ、とか。われわれが学生の頃、ジープ投げた、などとはしゃいでいたものである。

奥さんが病気をし、その医療費を稼ぐためにプロレスに入り、ハワイに渡ったり、ブラジルに行ったりした。ブラジルでは、当時 10 年間不敗を誇った 그레이シー柔術と戦い、得意の腕がらみで脱臼させ、勝利をおさめた。今でも 그레이シーはそのときのことを楽しそうに話す。木村はきれいな試合をする。

昭和 29 年、力道山と戦って敗れたのだが、どうも遠藤や大山の話を知ると、引き分けの約束に違背して力道山がショービジネスを優先したからだという。結果的には、プロレスを日本に根付かせたのは力道山であるが・・・後年木村は、若い頃はいろんなことがありますから、と力道山が亡くなったあとでも多くを語らなかった。

木村は、母校拓大の柔道講師として専念し、その中から全日本選手権者もだした。65 歳で完全に引退し、講道館にも戻らなかった。その理由が、プロに行った人間だから、というものである。柔道では七段

であるが、それ以上は名誉職のようなものである。別に名誉を欲しがった人でもない。1993年大腸がんで逝去された。奥さんは、木村がプロレスで稼いだお金で当時は高価であった薬を使用することができたし、まさかご自分の病気が治るとも思っておられなかったらしい。木村が自分のしたいこともせずに、やむなく夫人の病気を優先した。奥様は、ご自分の病気が治って世界中を旅行することもできたし、最期まで看病できた、と感謝しておられる。

たとえば、山下泰裕選手はオリンピックで優勝し全日本10連覇をなしとげたが、木村の全盛時代に戦っていたらどうだろう、という話もでない。それほど飛びぬけた強さであったというべきだろう。熊本の先輩後輩だから仲はよかったらしい。木村がいう、山下も稽古のときに相手が弱かったら利き手と反対の技を練習するとか、いろいろあるはずだと。・・・お墓には、「木村の前に・・・」が彫られているという。

2007.08.18.